国　　語

注　意

1. 問題は全部で17ページである。
2. 解答用紙は(その1)(その2)がある。(その1)はマーク・シートになっている。
3. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。(ただし，マーク・シートにはあらかじめ受験番号がプリントされている。)
4. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
5. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが，どのページも切り離してはいけない。
6. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

マーク・シート記入上の注意

1. HBの黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する記号・番号の ◯ を塗りつぶしなさい。◯で囲んだり╳をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答が 1 のとき)

1	● ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⓪

4. 一度記入したマークを消す場合は，消しゴムでよく消すこと。╳をつけても消したことにならない。
5. 解答用紙をよごしたり折り曲げたりしないこと。

一　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

現代社会では、通うことが自明視されている学校。しかし、日本の学校制度の発足は一八七二年であり、わずか一五〇年程度の歴史しかない。

そもそも、同年代の子どもが皆学校に通うという学校制度は、近代国家の成立が必要条件となる。最初に国家と学校制度を結びつけて教育を論じた一人が、一八世紀フランスのコンドルセである。彼は教育を、国家の義務と考えた。市民を特権階級の支配から解放しただけで、格差がなくなるわけではない。不平等の縮小、市民社会を担う市民性の涵養（かんよう）、そのためにも教育が必要だと考えたのだ。

さて、コンドルセを生んだフランスは、現在も、政教分離の原則が徹底されている。ここでの政教分離とは、［　A　］、という意味ではない。むしろ、宗教が政治権力を掌握し、横暴を極めるのを防ぐことを想定している。前近代において、学校教育は宗教機関によって運営されるのが普通だった。コンドルセは宗教と公教育を切り離して世俗化し、教育は知育に限定されるべきだと説いたのだ。しかし、時代はコンドルセに追いついていなかった。今では当たり前とも思える理念が実行されるには、もう少し時間が必要であった。[1]

私たちがイメージする学校制度の起源は、イギリスに求められる。[2] 柳治男によれば、一斉授業の始まりは一九世紀初頭に遡る。それ以前の、庶民が受ける教育は個別指導が前提であった。しかし産業革命以後、ロンドンの一部にスラムが出現し、スラムの貧しい多くの子供を効率的にとりまとめる必要が生じたのである。こうした要請に対応する方法として編み出されたのが相互教授法であり、これが私たちのイメージする学級指導の起源である。

教師が生徒に［　B　］指導するのは、生徒の数だけ教師が必要となり効率的ではない。そこで有能な生徒を選び出し、まず教師がその生徒に読み書き計算を教える。その生徒は教師役となって他の生徒に指導する。この方法はモニトリアル・システムとか発明者の名前をとってベルランカスター・システム等と呼ばれる。

詳細は柳の著作に譲るが、事態が変わったのは一八三三年に開始された学校設置のための補助金制度であり、これが国家による教育への介入の始まりとされる。ただし国家が学校を設置する発想はまだなかった。ベルランカスター・システムを普及させていたのは、国民協会と内外学校協会という二つの民間団体であり、政府はこの二つの民間団体の傘下[3]で、団体の方式に沿って設置した学校のみに補助金を与えたのだ。民間団体を通さず教育委員会から直接学校設置者に補助金を支給するようになったのは、それから六年後のことだ。その後モニトリアル・システムは徐々に私たちがイメージする教室空間に変貌を遂げ、一斉授業が可能となりそれぞれの教室で授業を実施する教師が必要とされた。ここに至り学校施設のみならず体系的な教員養成[4]や教育内容の整備も求められるようになった。

なお国民協会は英国国教会に近く、学校も教会制度に組み込まれていた。それに対して内外学校協会は宗派的に中立をうたっており、その学校システムはアメリカに伝えられて大成功をおさめた。英国国教会では宗派間の対立が顕著であり、英国国教会に近い国民協会の学校を政府が支援することは、宗派間の対立を激化させる可能性があった。だから宗派間の対立を乗り越え、国家が学校システムを包括するには、内外学校協会型の中立性を備えた学校を創設するしかなかった。かくして内外学校協会の設置した学校は、宗教性を排除した公立学校として生まれ変わったのである。

一九世紀に成立した学校教育制度は近代国家の存在を前提とする。この時期に起こった変化は学校教育制度の発足だけではない。イギリスに端を発する産業革命がある。イギリスでは名誉革命後の「権利の章典」発布以降、王に対する議会の優越が認められ、議会制民主主義の基盤が確立した。さらにイギリスは多くの植民地を抱えており貿易を通じて国内資本の蓄積が進んでいた。大陸ヨーロッパに比して、安定的な政治基盤を構築していたため技術革新も進んだ。また一八世紀末ごろより穀物増産のために高度集約農法が推進されることとなり、議会の後押しで開放耕地を統合、所有権を明確化する第二次エンクロージャー（囲い込み）が行われた。これにより締め出された農民の賃労働者化が産業革命を後押しした。

一方アメリカ独立革命やフランス革命は共通言語や慣習を持つ民族を国民と位置づけ、国民主体の国家を築く機運を高めた。この動きはナショナリズムや基本的人権思想を発展させ、ナポレオン遠征を通じてこれらの思想がヨーロッパ各地に伝えられ

た。その結果、民族主義が喚起され、国民を主体とする国民国家[5]が生まれることとなった。

学校教育制度も、ナショナリズムや基本的人権などの思想とともに伝わったものの一つである。そして後にその学校を通じて国民国家を構成するのにふさわしい市民像や価値観が定着してゆくこととなった。

しかし学校と呼べるものは、歴史を遡れば近代以前にも存在した。現在にも脈々と受け継がれている、ヨーロッパの都市にある大学(ボローニャ・パリ・オックスフォード・ケンブリッジなど)は中世に設立されたものだ。さらに日本にキリスト教を伝えたイエズス会は教育事業に熱心だったことで知られる。尾中文哉によれば、イエズス会学校では、古くから競争試験が活用されていたという。また日本最古の学校とされるのが、栃木県にある足利学校である。設立時期は諸説あってはっきりしないが、室町時代中期までにはその存在が確認されている。江戸時代には多くの藩が有能な人材を養成するために、藩校を設立した。藩校での教育課程は体系化されており近代学校のイメージに近い授業が行われていた。一方、庶民の学校として寺子屋の存在が知られているだろう。寺子屋はまったくの私的な教育施設であったから、規模、就学年齢、教え方、教える内容や教材もバラバラであった。機能的な面では、こうした前近代の学校も近代以降の学校も［C］という点で共通している。では前近代の学校と近代の学校、一体何が異なるのか。

近代という時代の特徴に言及する際、しばしばフランスの歴史家フィリップ・アリエスが取り上げられる。彼は図像資料や私的な文章を手がかりに、当時の人々の心性を浮上させる手法を編み出した。そして「子ども」[6]という概念が近代以降の産物だと指摘し、社会学や教育学の、特に歴史研究に大きなインパクトを与え、社会史研究のブームを生んだ。

彼の議論で重要な点は次の二つである。一つ目は「子ども」という概念や類型自体、近代に入るまで存在しなかった点である。換言すれば、「子ども」という名称はなく、単に未熟な小さな大人とみなされていただけであった。そして彼ら彼女らは成長して、一定のことができるようになれば、いつの間にか大人と同じ仕事に従事していたのだ。

二つ目は、「子ども」という概念の誕生で、子どもは「大人」から切り離された点だ。それも単に概念レベルの問題ではなく、物理的に子どもを大人から隔離したのが学校だった。

つまり近代以降、「子ども」は「大人」とは異なる存在だとみなされるようになった。子どもは大人と異なり純真無垢で、保護や教育が必要とされる存在なのだ。そして単に「大人」と「子ども」が区別されただけではなく、子どもはこうあるべきという[7]社会的な規範性を帯びた存在になったのである。

かくして学校は子どもを保護し、教育する施設となった。それゆえ子どもを学校に通わせることが当然となり、学校教育は国家によって制度化された。言い換えれば、学校に子どもを通わせないことは非人道的であり、子どものもつ当然の権利の侵害になる。これこそが、近代学校の発足で根本的に変わった部分である。これ以降、国家のお墨付きを得た学校は、社会に不可欠な存在として根を下ろしてゆくのである。

（中澤渉『日本の公教育』による）

問一　空欄 A に入る語句として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 1 。

① 政治思想と宗教とを混同することがない
② 信教の自由を根拠として政治が宗教に介入しない
③ 宗教が全面的に学校生活を支配する
④ 政治と教育とが異なった側面から捉えられる
⑤ 政治が宗教教育を学校に強制する

問二　傍線部1「もう少し時間が必要であった」とあるが、具体的にどうなるまでの時間が必要であったのか。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 2 。

① 学校が教会制度に組み込まれるまで
② 相互教授法が発明されるまで
③ 宗教への中立性を備えた学校が創設されるまで
④ 国民国家が生まれるまで
⑤ 子どもが社会的規範性を獲得するまで

問三　傍線部2「私たちがイメージする学校制度」とはどういうものか。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 3 。

① 政教分離の原則による教育制度
② 庶民がうけることのできる教育制度
③ 教室における一斉授業による公教育の制度
④ 生徒が教師役となって他の生徒に指導する制度
⑤ 補助金を与えられた学校による教育という制度

問四　空欄 B に入る最適な語句を次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 4 。

① 一対一で
② 教室内で
③ 間接的に
④ 徹底的に
⑤ 親身に

問五　傍線部3「傘下」のよみを平仮名で記せ。**解答用紙（その2）を使用。**

問六　傍線部4「体系的な教員養成や教育内容の整備も求められるようになった」とあるが、なぜか。理由として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 5 。

① 一斉授業を行うための均質な教員の需要が増したため
② 国からの補助金を受けるようになったため
③ 学校が教会制度に組み込まれていったため
④ 国民国家の成立により教育が変化したため
⑤ 産業革命を後押しする働きを持つようになったため

問七　傍線部5「国民国家」とあるが、この文章の中で「国民国家」と呼ばれているものの定義として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 6 。

① 産業革命によって生まれた国家
② 言語や文化の共通性によってひとつのものと認識された国家
③ 民族主義が喚起されることによってのみ成立する国家
④ ナショナリズムや人権思想を発展させる国家
⑤ 議会制民主主義の基盤を持つ国家

問八　空間 C に入る最適な語句を次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 7 。

① 教材がバラバラである
② 子どもの存在を前提としている
③ 寺子屋的存在である
④ 知識を付与する
⑤ 大きなインパクトを与える

問九　傍線部6「「子ども」という概念」とあるがその説明として、誤っているものを次の①～⑤から一つ選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 8 。

① 近代に入るまで存在しなかった
② 「大人」という概念から切り離されたものである
③ 保護や教育が必要な対象である
④ 物理的な隔離もされるものである
⑤ 未熟な小さな大人とみなされている

問十　傍線部7「社会的な規範性」とはなにか。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 9 。

① 大人と子どもの理論的な差
② 公的にどうあるべきかの枠組み
③ 異なる存在としての自律性
④ 教育する具体的方法
⑤ 国家による完全な制度化

問十一　この文章に標題を付けるとしたら何がよいか。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 10 。

① 宗教と学校教育
② イギリスにおける教育制度
③ 一斉授業の成立と産業革命
④ 学校制度と「子ども」概念
⑤ 近代国家と学校制度の誕生

二　次の文章は「自分を語る対話」について書かれたものである。文章を読んで、後の問に答えよ。

この本では、対話という活動の一つの原理を、「私のテーマ」[1]の発見だと考えています。なぜなら、社会文化の現象についてどんなにくわしく調べても、「なぜ、この私がそれについて調べるのか」という問題意識がなかったら、インターネット上のウィキペディアのコピーに過ぎません。

「なぜ、この私が」というところに注目し、それを自分のことばで考えてみる、ここに、あなた自身の対話活動のオリジナリティがあります。ただ、自分を語るというと、どうしても「自分とは何か」というような話になります。

この課題は、哲学をはじめ、心理学・教育学等さまざまな分野で長い間考えられていることですが、ここでは、個人の「考えていること」と「表すこと」、つまり思考と表現の関係として検討してみることにしましょう。少しむずかしいと感じるかもしれませんが、ちょっと付き合ってみてください。

あなたには、まず自分の周りの現象(対象)が目に入ってきます。それについて、あなたは何らかの認識をしますが、そのときに重要な役割を果たすのが、感覚・感情(情緒)です。この作用によって、ストップがかかったり、あるいはエンジンがかかったりというように、無意識の判断が下されるわけです。

エンジンがかかったとき、それは、思考・推論(内言)にすすみ、それがさらに表現(外言)として姿を現します。内言というのは、外側からは見えない自分の中にあることば、外言というのは、外側に現れたことばのことです。すなわち、内言が外言として姿を現すという意味は、外側から見てわかるようになるということです。そして、この段階に至って、あなたは自分自身の考えていることを［　A　］のです。

この外側に現れた表現(外言)に、他者が反応し、いわゆるインターアクションと呼ばれる相互関係作用が起こります。このプロセスの総体が、言語活動、いわゆる言語コミュニケーションと称されるものです。

このように、人がものを考え、それを表現していくという行為は、感覚・感情(情緒)に支えられた思考・推論(内言)を、身体

活動をともなう表現（外言）へと展開していくことだということができます。話したり書いたりするという活動は、まさしく、この自分の中の［　B　］の繰り返しの上に成り立つ作業であり、このオウカン[2]の活性化こそが、言語活動そのものの充実につながる働きをしているわけなのです。

ここでとくに重要なのが、自己と他者の相互理解のプロセスです。

自己の内部での［　B　］のオウカンと同時に、自分と相手との間で起こる相互理解、すなわち、相手の表現を受け止め、それを解釈して、自分の考えを述べる、そうして、自分の表現したことが相手に伝わったか、伝わらないかを自らが確かめることによって、自分の「言いたいこと」「考えていること」がようやく見えてくるということになるのです。

［　C　］、このとき見えてきたものは必ずしも当初自分が言おうとしていたものとは同じではないことに気づくでしょう。というよりも、当初の自らの思考がどのようなものであるかはだれにもわからず、この自己と他者の間の理解と表現のプロセスの中で次第に形成されるものと考える方が適切でしょう。［　D　］、自分の「言いたいこと」というものは、そんなにすぐにはっきりと相手に伝えられるようなかたちでは、ことばとして取り出すことがむずかしいということでもあります。

このように考えると、「私」[3]は個人の中にあるというよりもむしろ、他者とのやりとりの過程にあるというべきかもしれません。「自分」というようなものも、実体としてどこかに［　E　］とあるというよりも、あなたと相手とのやりとり、つまりは、あなたを取り囲む環境との間にあるということになります。それは、あなたの固有のオリジナリティは本当にあなたの中にあるのか、という課題とつながっているのです。

あなたは、成長する段階でさまざまな社会や文化の影響を受けつつ、いろいろな人との交流の中ではぐくまれてきました。同時に、あなた自身の経験や考え方、さまざまな要素によって、あなたにしかない感覚・感情を所有し、その結果として、今、あなたは、世界にたった一人の個人として存在しています。この世に、あなたにかわる存在は、どこにもないということができるでしょう。

そして、このことによって、あなたが見る世界は、あなた自身の眼によっているということもできるはずです。

あなたが、何を考えようが、感じようが、すべてが「自分を通している」わけで、対象をいくら客観的に観察し、事実に即して述べようとしたところで、実際、それらはすべて自己を通した思考・記述でしかありえないということになります。どんな現象であろうと、「私」の判断というものをまったく消して認識することはありえない、ということになるのです。

しかも、この自己としての「私」は、そうした、さまざまな認識や判断によって少しずつつくられていく、あるいは少しずつ変わっていくということができます。

これまで出会ったことのない考え方や価値観に触れ、自らの考え方を振り返ったり、更新したりすることを通して、「私」は確実に変容します。

ですから、はじめから、しっかりとした自分があるわけではないのです。ここに、いわゆる[4]「自分探し」の罠があります。

本当の自分を探してどんなに自己を深く掘っていっても、何も出てきません。ちょうど真っ白な原稿用紙を前にどんなに頭をかきむしっても何も書けないのと同じです。

「自分」とは、「私」の中にはじめから明確に存在するものでなく、すでに述べたように、［　F　］ものです。

このように考えることによって、あなた自身を「自分探し」から解放することができるのです。そして、本当の自分とは、はじめから「私」の中にはっきりと見えるかたちで存在するものではなく、自分と環境の間に浮遊するものとしていつのまにか把握されるのです。

では、自分というものが他者との関係の中にあるとすると、そのような「自分」について語るとは、どのようなことなのでしょうか。

ところで、この「自分を語る」ということを話題にすると、必ずといっていいほど出てくるのが、「自分のことを人に語りたくない」、「他人に自分のことを知られたくない」、「自分の話を他人にするのは恥ずかしくて嫌だ」といった反応です。

それは、あたかも自分の個人的なプライバシーを他人から無理やり抉（えぐ）り出されるような、不当な感覚を覚えてしまう人が多いということのようです。

往々にして、なぜ自分のテーマを相手に提出するのかという自分自身の構えのないまま、そのテーマと正面から向き合わざるを得なくなった場合に、こうした反応は現れます。

テーマと向き合うというのは、そのテーマと自分との関係について考えるということです。ですから、自分を語るということは、テーマと自分との関係を語ること、つまり、自分の内面と対峙するということなのです。テーマと向き合うことは、このような要求に応えることになります。

自分の言いたいことを、自分のことばで語る、自分のことばで相手に伝えるということは、同時に、「自分に向き合う」ことでもあります。なぜなら、自分にとって自明であるはずの、さまざまな思考や表現についてもう一度考えるということは、わたしたち一人ひとりが、自身の考えをもう一度意識化するということでもあるからです。

自分に向き合うとは、「わたしは何を考えようとしているのか」を自分自身に問う、自分との対話だと考えることができます。そのために、自分は何に興味・関心があるのか、それは、自分の選んだ話題が、自分の本来の興味・関心とどのようにつながっているのかを考えることでもあります。そしてそれは、やや大げさにいえば、自分がなぜこのような人生という課題を選んだのかを考えはじめることでもあります。

このように考えると、自分に向き合うということは、自分を［G］し、他者との関係の中で、自分がどのような個人であるかを明確にしようとすることであるとわかります。いわば、自分で自分自身に向かって「わたしはだれ？」と問いかけるようなものです。

自分にとって、この話題はどのような意味があるか、この話題について対話することで、結局、わたしはどのような解決を望んでいるのか、といった自分自身の深いところにある〈何か〉、この何かが、それぞれの人にとってのテーマです。

自分に向き合うとは、このテーマと自分との関係、すなわち、自分自身の立てたテーマが、自分の本来の興味・関心とどのようにつながっているのかを通して、自らを［G］し、自らが何者であるかを自覚することなのです。

この世で生きていくということは、自分のしたいこと、やりたいことをどのようにテーマ化し、それについて他者とともに実

現していけるかということで、ここに考える個人の使命があるといえるでしょう。[5]対話の活動とは、そうした個人の使命を、ことばによって引き受け、他者とのことばの活動の場を形成する営みだということなのです。

（細川英雄『対話をデザインする』による）

問一　傍線部1「私のテーマ」の発見」とは、どういうことか。その説明として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 11 。

① 自分自身に関することで、普遍的な問題を含んだテーマを見つけること。
② 自分自身が興味や関心を強く持つことができ、他者にとっても有益なテーマを見つけること。
③ 自分自身が長く興味と関心を持ち続けることのできる「人生の課題」となるテーマを見つけること。
④ 自分の興味や関心に根ざした、他者との対話を通して解決したいと自分自身が考えるテーマを見つけること。
⑤ 自分だけでなく社会でも広く関心を持たれていることで、人々の議論による解決が必要とされるテーマを見つけること。

問二　空欄 A に入る文として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 12 。

① はじめて自分のことばとして自覚するに至る
② はじめて正しいかどうか判断できるようになる
③ はじめて自分のこととして認識するようになる
④ はじめて自分自身の課題として理解するに至る
⑤ はじめて感情ではなく理性で受け止めるようになる

問三　二つの空欄 B に入る語句として最適なものを、本文から五文字抜き出し記せ（句読点等を含む）。**解答用紙（その2）を使用。**

問四　傍線部2「オウカン」の「カン」と同じ漢字を含むものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 13 。

① 慣習　② 還暦　③ 感激　④ 交換　⑤ 循環

問五　空欄 C 、 D に入る語句を順番に示した最適な組み合わせを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 14 。

① しかも・つまり
② だから・しかし
③ なぜなら・さて
④ さらに・かえって
⑤ ところで・ですから

問六　傍線部3「「私」は個人の中にあるというよりもむしろ、他者とのやりとりの過程にある」とはどういう意味か。その説明として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 15 。

① 個人の見解は、常に他者から影響を受けて変化するということ。
② 人の個性は、他者との交流などの環境から強く影響を受けて、形成されるということ。
③ 独自の考えと思っているものでも、実際は他者から影響されて生まれたものが多いということ。
④ 人のオリジナリティは、その人自身にあるというより、他者との関係によって変容し、一定しないということ。
⑤ 自らの思考は、自分の中にあるのではなく、自己と他者との言語コミュニケーションの過程で形成されるということ。

問七　空欄 E に入る語句として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 16 。

① 呆然　② 漠然　③ 厳然　④ 粛然　⑤ 当然

問八　傍線部4「「自分探し」の罠」という表現の説明として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 17 。

① 自分一人で「自分探し」をすることの大変さを、罠にかかることに喩えた表現。
② もともと明確には存在しない「自分」を探すという状況に陥ることを、罠に喩えた表現。
③ 「自分とは何か」という問題意識にとらわれてしまう心理状態を、罠に喩えた表現。
④ 自分とは何者かを知りたいと思い苦悩する人の姿を、罠にかかることに喩えた表現。
⑤ 自己としての「私」を求めて思い悩む人々の姿を、罠にかかった動物に喩えた表現。

問九　空欄 F に入る文として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 18 。

① 自分の考えや価値観を振り返り、自己と向き合う中で、次第に明らかになってくる
② 自分の考えや言いたいことを自らに問い、内省することによって、次第に立ち現れる
③ 他者との競争の中で、しっかりしたものとして、次第に自己の中に存在するようになる
④ 新しい考えや価値観に刺激を受けながらも、確固たるものとして自己の中に存在し続ける
⑤ 相手とのやりとり、つまり他者とのインターアクションのプロセスの中で次第に少しずつ姿を現す

問十　二つの空欄 G に入る語句として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 19 。

① 主体化　② 一般化　③ 差別化　④ 相対化　⑤ 絶対化

問十一　傍線部5「対話の活動とは、そうした個人の使命を、ことばによって引き受け、他者とのことばの活動の場を形成する営みだ」とあるが、筆者は「対話の活動」をどのようなことだと述べているのか。その説明として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 20 。

① 個人の夢実現のために、他者の協力を得るための言語活動の場を形成すること。
② 個人が幸福な人生を送るため、他者との豊かなコミュニケーションの場を作ること。
③ 個人が人生において自分でしたいことを明確にするために、他者と交流する場を形成すること。
④ 個人が担う責任を果たすために、他者とのより良い関係を築くための言語活動の場を提供すること。
⑤ 個人のなすべき人生の課題をことばによって実現するために、他者との言語活動の場を形成すること。

問十二　筆者は、「自分」について語るとは、どういうことだと言っているのか。その説明として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 21 。

① 自分の体験・経験を正直に、ありのままに語ること。
② 自分が考えていること、伝えたいことを素直に自分のことばで語ること。
③ 問題意識を持って自分が選んだテーマと自分との関係を深く考え、そのことを語ること。
④ 自分が興味や関心をもったことについて、事前に詳しく調べて、自分の考えを語ること。
⑤ 問題意識を持って決めたテーマについて、詳細に調査した結果だけではなく、自分の考えも語ること。

問十三　本文の内容と合致しないものを、次の①～⑤から一つ選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 22 。

① 思考は表現されてはじめて相手に理解される。

② 自分というものは、環境からのさまざまな影響によって、変化していくものである。

③ 本当の自分は、最初から自覚できるようなかたちで自分自身の中に存在するのではない。

④ 自分に向き合うとは、自分が考えていることを自問することで、自分と対話し、自己を実現していくことである。

⑤ 言語活動には、対象の認識、情緒の作用、無意識の判断、思考・推論、表現、他者の反応というプロセスがある。